派遣研究者：王　傑

相手先機関：上海師範大学

専 門 分 野：明清時代の都市文化史

テ　ー　マ「李卓吾の湖北麻城における文化的、社会的活動に関する考察」

月度報告書（2012 年 4 月－9 月）

四月の研究報告書.....1

五月の研究報告書.....2

六月の研究報告書.....4

七月の研究報告書.....5

八月の研究報告書.....6

九月の研究報告書.....7

四月の研究報告書

王傑

四月中、15日まで上海図書館で明代思想家李卓吾と交遊関係を持つ知識人(主に、湖北黄安県と麻城県出身の者)の資料調査、収集しました。

① 湖北省黄安県出身の耿定向という思想家の一族の状況を知るために、『黄安耿族譜』を調べ、必要な部分を書き写しました。この作業は三日間ほどかかりました。

② 湖北省麻城出身の麻国桢という知識人の文集をコピーし、今まで読み続けています。

③ 李卓吾が活動していた湖北省黄安、麻城、黄梅などの地域の民間宗教の状況を知るために、『地方志』に記録している『寺観志』を調べています。

四月十五日以降、書店で李卓吾と親密な交遊関係を持つ湖北省公安県出身の公安三袁の文集を購入し、李卓吾との具体的な交遊関係を分析しています。また都市研究に関する書籍をも購入し、読んでいます。その中で李孝悌という台湾学者が編集した『中国的城市生活』という論文集は、各方面から明清、及び明清以降の知識人の都市生活や都市の状況を紹介しています。私の研究テーマと直接な関係はないが、その中から研究のヒントを得ています。

この間、論文の方向性について、嘗て都市研究に従事したことのある上海師範大学の洪煜先生と相談しました。相談した結果、一つは、李卓吾と知識人グループの内部交流と麻城都市文化との関係の角度から麻城における李卓吾の文化活動の意味を論じることである。もう一つは、李卓吾はどのように自己の生活空間を作り、いかに自己の生活を営んだのか（禅、道を論じることという共通の話題を中心とする彼の交遊活動を、その生活を営む一つの方法として考える)、彼のこうした自己生活を営む方法は、麻城を中心とする都市知識人の生活スタイルに与える影響、及び麻城という都市文化(都市禅文化を含める)、民間宗教と如何なる関係を持つのかという角度から論文を進めることである。私個人としては、麻城の禅信仰と民間宗教との関係、及び両者と麻城における李卓吾の仏教的な文化的活動との関係にすごく興味を持つため、これから二つ目の角度から論文を進めたいと考えております。

麻城の民間宗教と禅文化を知るために、上海師範大学銭杭先生の紹介で、佛教研究の専門家である上海師範大学の厳耀中先生と知り合うことができました。厳先生の教えで、どのような方法で麻城禅信仰と民間宗教の状況を調査することを知りました。とにかく先生方のおかげで、研究はすこし前に進みました。

また麻城出身の李卓吾研究の専門家である凌礼潮先生と連絡することができて、先生のご指導のもとで、五月に入ってから、麻城などの都市に行き実地調査を行う予定です。

報告は以上です。

五月の研究報告書

王傑

五月九日から十八日まで、湖北省麻城市へ資料調査に行ってきた。

麻城市は明末思想家李卓吾が十六年間ぐらい生活していたところである。その間、李卓吾は麻城で様々な文化的活動を展開した。今回の調査の目的は主に以下の三つがある。一つ目、李卓吾がかつて生活していた龍湖というところを訪ねる。二つ目、明末麻城の都市文化に関する資料、及び李卓吾の文化的活動に関する資料の収集。　三つ目、麻城出身の李卓吾研究の専門家である凌礼朝先生との交流。

まず、麻城に着いた翌日、凌先生が所在する麻城市の都市研究センターを訪ね、凌先生の案内で李卓吾がかつて生活していた龍湖を訪ねた。龍湖は現在、麻城の北の阎家河镇に属する。凌先生の話によると、七十年代、河の水路を改造したせいで、龍湖に流れ込む水源がなくなり、龍湖を田んぼに変身させた。2002 年に、一時的に龍湖の本来の姿を取り戻すことができたが、その後、また田んぼになった。そのため、私の目の前に現れた龍湖の姿もちいさな水のたまり場のある田んぼにすぎない。にもかかわらず、自らそこの土地を踏むと、李卓吾は当時友人と一緒に詩を唱和する光景が見えるような気がした。

十一日、麻城市の地方神を祭る五姥山廟を訪ねた。麻城の地方神は土主、福主と称され、道教の神様である。おもしろいのは、五姥山廟は本来道観であるが、廟と称され、福主の隣に観音様も祭られている。つまり、麻城人の観念の中で、仏様も神様の一種である。このような考え方はいつから形成されたかについて、文献を調べて見たが、それに関する証拠を見つからなかった。しかし、明末李卓吾と交遊関係を持つ僧人道一は、麻城で三教（道教、儒教、佛教）堂を建てた。三教堂は現在も現存している。道一以外に、李卓吾と交遊関係を持つ麻城の多くの知識エリートのほとんどは、佛教、あるいは道教を信仰する傾向がある。しかもこのような傾向は李卓吾と交遊する以前から持つものである。つまり、麻城には三教合一の思想を受け入れる文化的土壌が以前からあったと考えられる。言い換えれば、三教合一を唱える李卓吾の思想、及び彼が麻城で行った佛教を布教する活動は、麻城における神、仏合一の都市文化を活性化させた結果、多くの知識人の神、仏を信仰する傾向を増したと考えてもよいである。

十二日から十八日まで、凌先生が所在する都市文化研究センターで資料を調査、収集する作業を行った。凌先生の都市文化研究センターは現在に主に李卓吾研究と湖北から四川への移民活動の研究を携わっているし、大量の族譜を収蔵している。今回、主に李卓吾と交遊関係を持つ麻城の梅、李、周、劉氏という四大家族の族譜に収められている李卓吾と交遊する人々の文集から、李卓吾と関連する内容、及び彼らの文化的活動の特徴に関する内容を収集した。その多くの文集の中に現在までまだ公開されていないものもあった。つまり、今回の調査でたくさんの新しい資料を収集することができた。

十八日から五月末まで、収集した資料を整理し、論文の方向性を改めて考え直す作業を行った。

湖北省麻城「龍湖寺」

六月の研究報告書

王傑

六月一日から十六日まで上海で資料の整理をしました。十六日から二十五日まで北京へ行きました。北京へ行く目的は二つありました。一つ目は、李卓吾の墓を訪ねることです。二つ目は、国家図書館で資料調査を行うことです。

十七日、北京通州区の海子公園へ行きました。そこには李卓吾の墓があります。墓は南に位置し北に向いており、直径は 2.25 メートル、高さは 1.55 メートル。石碑の上に「李卓吾墓」という焦竑の題字があります。焦竑は南京出身、明末の有名な知識人であり、李卓吾の友人でもあります。

人生後半の多くの時間を湖北麻城で過ごした李卓吾の墓がなぜ北京の通州にあるのでしょか。それは李卓吾の人生の激変と関係があります。李卓吾が萬暦二十九年（1601)、当局の迫害で麻城を離れざるを得なくなりました。彼は先に河南商城へ行き、後に馬経綸という人物によって通州に迎えられました。そこで当局に逮捕され、獄内で自殺した後、現在の通州海子公園に埋葬されました。つまり、李卓吾は通州にある馬経綸の家で一年近くの避難生活を送ったのです。では、李卓吾はその一年近くの時間をどのように過ごしたのでしょうか。それについて、北京国家図書館へ行って調べました。

十八日から二十四日まで国家図書館で主文献と地方志を結合させる方法で資料調査を行いました。『地方誌』の方は主に清と民国の『通州志』を調べました。文献の方について、これまで通州における李卓吾の生活に関する研究はほとんどないので、主に李卓吾の主著『焚書』を中心としてそれに関連する内容を調べ、整理しました。調査の結果を簡潔に以下のように要約します。

李卓吾は萬暦二十九年（1601）四月から、通州馬経綸の蓮花庵に寓居します。その間、友人袁中道、汪可受、 潘廷試、鄭子玄などの友人が李卓吾を訪ねてきました。李卓吾と一緒には湖北麻城を離れたのは、楊定見､汪本鈳、及び僧人十数人がいます。李卓吾は馬経綸と弟子たちと日々『易』を読む生活を送りました。それ以外に、彼と馬経綸二人で、現在河北薊縣西北にある盤山と現在北京市に属する房山を遊覧したほかに、一人で北京の西山極楽寺を訪ねました。つまり、通州での李卓吾の避難生活は楽しいとはいえないが、充実していました。そのために、嘗ての友人劉東星は李卓吾が山西にある自分の官署に来るようにと誘ったが、李卓吾に断られました。

李卓吾は通州で『易』を読んだ成果として『九正易因』という書物を完成させました。その後しばらくして李卓吾は逮捕され、獄死しました。では、李卓吾はなぜ死を前にした際に必死に『易』を読み、『易』を整理する作業に励んだのでしょうか。いわば、通州に於ける彼の文化的活動は何を意味したのでしょうか。この問題について、引き続き研究調査を行うつもりです。

七月の研究報告書

王傑

七月に入ってずっと九月に発表する論文を書いていました。上海に来てからの研究内容の一部をまとめるという形で「麻城における李卓吾の生活－その交遊と文化的活動を中心として－」というテーマにしました。思想家の思想ではなく、その社会生活を考察する論文を書くのははじめてでした。そのため、最初にはどのように書いていくのかを迷っていました。何回か考え直してからようやく論文を書いたが、最終的には論文の内容を十分に深めることはできませんでした。いわば、私の勉強不足の問題で結果的によい論文を書くことはできませんでした。しかし、今回の発表のおかげで、自分の勉強の不足点を気付かされました。

後、報告しなければならないことがあります。今回の論文は私が書いたが、麻城市都市文化研究センターの凌礼潮先生は前回麻城で資料調査をした時に、大事に保管された族譜を見せてくれればばかりではなく、龍湖なども案内してくれましたので、その感謝の気持ちを込めて、今回の論文発表だけは私の勝手な判断で私と凌先生連名という形で発表することにしました。

この間、東大東洋文化研究所の安富先生から『生きるための論語』という自著をいただきました。論文を書く時の気分転換に、この本を読みました。都市文化の研究と直接的な関係はありませんが、先生はこの本を書く際に使用している方法論が啓発的でした。この本の中で、安富先生はアメリカの数学者であるノーバート・ウィーナーの学習社会論を用いて、『論語』を学習に基づいた社会秩序という思想として理解していました。学習とは先生の解釈によれば、自己の適応回路そのものに手をつけるフィードバックという意味でした。つまり、『論語』に関する安富先生の理解は内在的、独特なものでした。

にもかかわらず、安富先生の考えは孔子と一脈通じる物がありました。先生も『論語』のように循環的な学習を通して君子にあたる人格を育ち、そして君子によって国を治めることを望んでいます。

現実社会に関する安富先生の考え方は理想的であるが、『論語』の観点から現実社会、そして経済現象を問い直すという考え方はすばらしかったです。なぜなら、私は大学の時に経済学を勉強していまして、修士課程に入ってから中国思想を習いはじめした。しかし、私はずっとこの二つの分野を分離して考えて、両者の間に何かの関係があることを一度も考えたことはありませんでした。安富先生のこの本のおかげで、すべての学問は独立するものではなく、その間に何らかの関係があるということを分かり、これからもっと勉強して自分の研究視野をもっと拡げるべきだと思い始めました。そうすれば、都市文化に関する研究もいろんな角度からできるではないかと思いました。

八月の研究報告書

王傑

八月に入って上海師範大学が夏休みに入り、授業はありませんので、ほとんど下宿、あるいは上海図書館で本を読んだりして過ごしました。

七月に書いた論文では、湖北省麻城市出身者、あるいは麻城在住者の李卓吾との交遊関係について考察しましたが、そのほかの交遊者については言及しませんでした。そのため、八月に入ってから、李卓吾と他の地域の出身者との交遊関係に関する詳細を調べました。特に李卓吾と湖北公安市出身の公安三袁（袁宗道、袁宏道、袁中道）との関係について詳しく調べ、彼らの文集も読みました。その中には李卓吾に贈った詩や李卓吾宛の書簡を数多く収めています。袁宏道の「性霊説」は李卓吾の「童心説」の影響を受けて形成されたということは、これまでの研究では定説となっています。確かに、かつて三度ほど龍湖（麻城における李卓吾の住所）を訪れ、李卓吾に教えを乞うた彼らが、李卓吾と同じように自適な生活を求め、仏学の修行によって精神的な解脱を得ようとしたことは、彼らの文集の内容から確認できます。しかし、彼らの性格は李卓吾ほど過激ではなく、道学にも不満を感じていましたが、李卓吾のように道学批判に走りませんでした。それどころか、袁宏道は李卓吾の『蔵書』が刊行される前後、李卓吾の学問について疑問を感じ始め、修行を重視しないという李卓吾の禅的な考えに反対して、修行を重視する浄土思想を提唱し始めました。

にもかかわらず、李卓吾と公安三袁との交遊は、まず李卓吾の交遊範囲を拡大させることになりました。公安三袁は明末知識人社会の中で広い交遊範囲を持っていました。それに対して李卓吾は『焚書』の刊行によって、明末知識人社会の中で次第に有名になりましたが、交遊範囲は狭いままでした。しかし、公安三袁との交遊によって、公安三袁と一緒に仏学を学ぶ仲間はみな李卓吾と交遊関係を持つようになり、その中には李卓吾に経済支援を行った知識人もいました（この点に関しては、これから詳しく調べるつもりです）。そのほかに、李卓吾と公安三袁との交遊関係は、湖北麻城における李卓吾の社会基盤を固める役割も多少果たしました。公安三袁は麻城名族の梅氏一族の梅国楨、梅之煥と親交がありました。李卓吾も梅氏一族の梅国楨などと交遊関係を持っていました。公安三袁、とりわけ袁宏道と、李卓吾、梅国楨の三人はよく書簡を通じてお互いのことを論じたりしました。つまり、李卓吾は公安三袁との交遊関係によって、梅氏一族、とりわけ梅国楨との関係を一層親密にしたのではないかと推測できます。梅氏一族との親密度が増せば増すほど麻城社会における李卓吾の社会基盤は固くなります。一方、公安三袁も明末における有名な知識人である李卓吾との交遊関係によって、ある程度知識人社会における彼らの知名度を高めることにもなりました。

以上は、主な今月の研究内容です。これからこれらの内容についてもっと詳しく調べる予定です。

九月の研究報告書

王傑

九月は主に、李卓吾と交遊関係を持つ公安三袁の文集を読んで、それに関連する資料の整理作業をしました。また、九月二十二日から二十六日まで河南省商城県で開催された李贄学術シンポジウムにも参加しました。商城県は河南省信陽市に属しており、昔の革命根拠地である大別山区の一部で、今でも経済的には貧しいところです。李贄学術シンポジウムがこのようなところで開かれるのは、河南商城の黄柏山にある無念(李卓吾の友人)の法眼寺が、かつて李卓吾の一時的な避難地だったからです。1601 年、李卓吾は当局の追放を逃れるために、法眼寺で三ヶ月間滞在したことがありました。その後、北京の通州にある馬経綸の家に移ったのです。

近年、商城出身の起業家である黄道林氏が、黄柏山の旅行資源を開発する際、法眼寺からちょっと離れたところに李贄書院を建てました。今回のシンポジウムは、そこで行われたわけです。私が中国で国際的なシンポジウムに参加するのは初めてでした。まず驚いたのは、今回のシンポジウムは、河南省商城県によって主催されたということです。私の考えでは、学術交流は政府とは何の関係もないことのはずですが、中国では事情は異なっていました。もう一つ驚いたことは、出席者の中には研究者以外に、政府官僚や出版社や李贄の後代も参加したことです。つまり、中国では学術研究というものは、単なる学術領域に止まるのではなく、政府や出版社とも密接な関係があるのです。この点は私が理解できないところであると同時に、これから受け入れなければならないことでもあります。

今回のシンポジウムの参加者は韓国、日本の研究者の他に、中国の大学の先生や政府官僚もいました。李卓吾の思想に関する研究論文は多いようです。私は今回二篇の論文を発表しました。一つは『麻城における李卓吾の生活－その交遊と文化的活動を中心として－』という論文で、もう一つは博士論文中の一章、『李卓吾に対する耿李論争の影響』という論文です。『李卓吾に対する耿李論争の影響』という論文は、当時私の指導教員であった山口先生に評価されましたが、この論文に対する中国における李卓吾研究の第一人者、即ち今回のシンポジウムの司会者である張建業先生の評価は、極めて保守的でした。その原因は、李卓吾及びその思想に対する私の見方が、李卓吾を高潔な啓蒙的思想家と見なす張先生の観点と対立していたところにありました。張先生の観点は、中国国内における李卓吾研究の限界を示しているのではないかと私は思います。つまり、中国国内では、一人の思想家の思想について研究する際、テキストが何を意味したか、あるいは意味しようとしたことをそのまま解読せず、まず一つの枠を思想家に嵌めて、ある種の既定先入観を持ってテキストを解読しようとする研究者が多いようです。今回のシンポジウムもこの点をよく示しています。だから、もし中国で研究を続ける場合、このような研究方法を徹底的にひっくり返す必要があるではないかと私は考えています。

以上は、私が今回のシンポジウムを通じて見た中国の学術研究の現状の一部分です。